校長室だより～燦燦～ №３１４

# 幸福三説

2021.3.7

人は、運がいいとか運がわるいなあなどということがある。明治の文豪、幸田露伴は「運」について、次のように語っている。

「福や運を論ずるのはあまり高等ではないように思われるが、人が一所懸命努力したり苦労したりするのは福を得るためなのだから、福について考えるのは悪いことではない」

露伴は、自著『努力論』で「幸福三説」なるものを主張している。それは「惜福」「分福」「植福」の三つからなる。

「惜福」とは、自らに与えられた福を取り尽くし、使い尽くしてしまわずに、天に預けておく、ということである。その心がけが、再度運にめぐり合う確率を高くする、と説いている。露伴は「幸福に遇う人を観ると、多くは『惜福』の工夫のある人であって、然らざる否運の人を観ると、十の八、九までは少しも惜福の工夫のない人である。福を取り尽くしてしまわぬが惜福であり、また使い尽くしてしまわぬが惜福である。惜福の工夫を積んでいる人が、不思議にまた福に遇うものであり、惜福の工夫に欠けて居る人が不思議に福に遇わぬものであることは、面白い世間の現象である」と述べている。

「分福」とは、幸福を人に分け与えること。自分ひとりの幸福はありえない、周囲を幸福にすることが、自らの幸福につながる、と説いている。「恩送り」「情けは人のためならず」と近い考え方である。露伴は「すべて人世の事は時計の振子のようなもので、右へ動かした丈は左へ動き、左に動いた丈は右に動くもの、自分から福を分ち与えれば人もまた自分に福を分ち与えるものだ」と述べている。

「植福」とは、将来にわたって幸せであり続けるように、今から幸福の種を蒔いておくこと、精進（正しい努力）し続けること。過去に自らが蒔いた種が芽を出し、今の自分を創っている。過去を書き替えることはできないが、今から良い種を蒔き続ければ、望ましい未来につなげることができる、と説いている。リンゴの木がまだ花を咲かせ、実をつけているうちに、種を蒔き、接ぎ木をし、新しいリンゴの木を育てておく。それを自分の子孫が食べる。これが植福である。一人の植福がどれだけ社会全体を幸福にするか計り知れない。植福において、個人と社会の福がつながる。

誰でも幸福になりたいものである。「幸福」こそ、人間にとって最大のテーマであろう。その幸福を求めて、これまでに実に数多くの幸福論が書かれてきた。明治末から大正初期にかけ、暗い時代が続いた。事業の失敗や失業、貧困など、様々な外的要因によって自らを不幸だと思い込み、悩み、苦しみ、陰惨な思いに沈む人が多くいた。

露伴は「どうすれば人は必ず幸福になれるか」というスタイルの幸福論は不可能であると考え、「どういう心がけで生きれば、不本意なことが多い世にあって人生を肯定的に生きられるか」を説いた。そして、露伴が書いた本のタイトルは『幸福論』ではなく、『努力論』だった。幸福を引き寄せるために、露伴は「幸福三説」なる三つの工夫を述べている。

福とは天に向かって矢を放った状態だといえる。矢は必ず落ちてくる。幸田露伴の時代と現代とでは、まるっきり時代が違うという方もいるかもしれない。しかし、状況は似ているようにも思える。今だからこそ、露伴のいう“努力”、すなわち「惜福」「分福」「植福」の三つの工夫が必要なのではなかろうか。